



吉浦 潤次（元大阪府立交野高等学校）

（2013年3月 博士前期課程修了）

もう一度勉強したいとか、気になることを詳しく追求したいとか、中学校、高校などの現場で働く教師なら誰でもそういう願いを心の片隅に持っています。毎日の嵐のような業務の中、自分が英語教師であることをほとんど忘れていた時間も長いものです。長い教員生活の中で、いつかまとまった研究の時間が欲しいと常々思っていました。望まない役職に次々と選ばれていたが、やがてそれまでの無理がたたって入院し、3ヶ月の休職中に、快復したら大学院で勉強しようと思いましたが、

五十九歳で言語文化研究科に入学させていただきました。同じリカレントの方々とも知り合い、再び大学で勉強できることを幸せに感じました。参考文献を読み、アメリカまで調査に行き、ただ一つのことをとことん調べていくことが、これほど楽しく、スリリングであるか、身を以て感じました。さらに学校現場の授業でも、教材選びの視点やプリント作りに論文で必要とされる客観性の目が働き、文章の書き方にも一層の注意を払うようになりました。

もし30代、40代でそれぞれ一回ずつこうした時間を持っていたら、どんなによかったらと思うかと思えます。